

ICT活用による個別最適な学習推進モデル事業（2年次）報告書

岡山県立倉敷中央高等学校

1 はじめに

「個別最適な学び」とは何か。この問いは、本研究を進めていくうえでの大前提となるもので、その解釈により、研究の方向性は大きく変わってくる。このことについて本研究では、中央教育審議会の令和3年答申『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』を参考にして、「個別最適な学び」を次のように捉えている。

子供一人ひとりの特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」と、教師が子供一人ひとりに応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が、学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」とを学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」である。

研究1年目では、学習アプリを使って「個に応じた指導」に注力してきたが、研究2年目では、「学習者視点」に着目し、学習が最適なものになるように生徒自らが学習を「調整」できるようになることを目標にした。教員がいかに働きかけるのか、学習するのは生徒であり教員ではない。生徒を動かすのは学習アプリを使いなさいという指示ではなく、いったい何なのか。この点に重きを置いたのが本研究の2年目であった。

前述した令和3年答申にもあるように、これからの学校においては、子供が「個別最適な学び」を進められるよう、教師が専門職としての知見を活用し、子供の実態に応じて、学習内容の確実な定着を図る観点や、その理解を深め、広げる学習を充実させる観点から、カリキュラム・マネジメントの充実・強化を図るとともに、これまで以上に子供の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められている。

2 事業研究の概要

(1) 研究主題

ICTを活用した個別最適な学びを通じた学習習慣の定着による基礎学力の向上と主体的な学びの実現

(2) 研究主題設定の理由

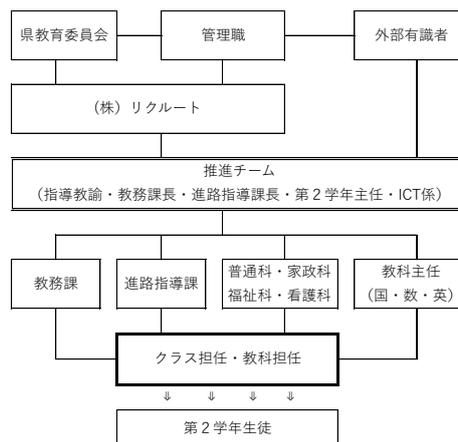
本校は普通科（類型・子どもコース・健康スポーツコース）、家政科、看護科、福祉科からなり、各科の多様な魅力を持つ生徒一人ひとりが夢や目標を実現することを目指している。生徒は真摯に活動しているが、興味・関心の方向も、学習習慣・学習態度もさまざまである。その生徒達の潜在的な意欲・資質を引き出し、積極的・主体的な学びを継続する力を養うことで、一人ひとりのキャリア開拓につなげたい。そのためにはICTを活用した効果的かつ効率的な学びの方法を導入することが必要だと考える。

(3) 研究内容

個々の生徒が、自身の能力や理解度に応じた学習を効果的に進めるとともに、興味・関心等に応じた主体的な学習を深め、知識や技能を広げることができるよう、1人1台端末とEdTech等の効果的なICT活用についての実践研究を行う。本研究を通して、「指導の個別化」と「学習の個性化」の2つの側面からのアプローチによる生徒の学習習慣及び基礎学力の定着と学習をサポートする教員の指導力の向上に取り組む。

(4) 研究体制

ICT活用による個別最適な学習を推進するチームを立ち上げるとともに、EdTech サービス「スタディサプリ」を利用するため、開発会社であるリクルート及び外部有識者（大学教員）と連携して研究に取り組む。



(5) 研究計画

①令和5年度（1年目）

◎学習習慣の定着を図る。

- ・指導教諭を中心とした「ICT活用による個別最適な学習」推進チームを立ち上げる。
- ・教員間の共通理解を深めるため、教員を対象にした外部有識者による個別最適な学びに関する講演会を実施する。
- ・県内外の「スタディサプリ」活用先進校への学校訪問を実施し、導入事例の研究を行う。
- ・リクルートと連携して、「スタディサプリ」の効果的な活用研修を行う。
- ・年4回（4月、7月、11月、3月）、県教委、リクルートとの調整委員会を実施し、事業の進捗状況を確認し、取組についての軌道修正等を行う。
- ・生徒の「スタディサプリ」活用状況と各種テスト、学習実態調査との相関について推進チームによる定期的な分析会を実施する。
- ・生徒面談（年3回）を通して活用状況の実態を把握し、問題点を洗い出し、担任による生徒個々への個別支援や助言を実施する。
- ・1年目の活用状況を総括し、2年目に向けた指導の改善策を検討する。
- ・1年目研究成果発表会を実施し、2年目の研究に向けた意見交換を行う。

②令和6年度（2年目）

◎基礎学力の定着を図る。

- ・個々の生徒に合わせて「指導の個別化」と「学習の個性化」を推進する。
- ・生徒を対象にリクルートによる前年度の活用状況報告会を実施し、好事例を共有する。
- ・年4回（4月、7月、11月、3月）、県教委、リクルートとの調整委員会を実施し、事業の進捗状況を確認し、取組についての軌道修正等を行う。
- ・生徒の「スタディサプリ」活用状況と各種テスト、学習実態調査との相関について推進チームによる定期的な分析会を実施する。
- ・生徒面談（年3回）を通して活用状況の実態を把握し、新たな問題点を洗い出す。担任による生徒個々への個別支援や助言を実施する。
- ・他の研究校（津山商業高校、東岡山工業高校）との情報交換会を実施する。
- ・2年目の活用状況を総括し、3年目に向けた課題の把握とその改善策を検討する。
- ・2年目研究成果発表会を実施し、3年目の研究に向けた意見交換を行う。

③令和7年度（3年目）

◎自己肯定感と自己調整能力を高め、さらなる学習習慣の定着と基礎学力の向上を図る。

- ・生徒面談（年3回）やアンケート調査を行い、生徒の変容を記述する。
- ・学習習慣の定着や基礎学力の定着と、生徒の自己肯定感との関係性の有無を分析する。
- ・担任による生徒個々への個別支援や助言を実施する。
- ・年4回（4月、7月、11月、3月）、県教委、リクルートとの調整委員会を実施し、事業の進捗状況を確認し、取組についての軌道修正等を行う。

- ・他の研究校（津山商業高校、東岡山工業高校）との情報交換会を実施する。
- ・3年目の活用状況の総括に加え、3年間の学習時間の推移と基礎学力の定着を分析する。
- ・3年目研究成果発表会を実施し、3年間の研究成果を発表する。
- ・本研究の成果を県内の他校に紹介し、EdTech サービスの導入を検討している学校に助言を行う。

3 令和5年度（第1年次）について【要約】

（1）取組

教職員にはスタディアアプリを活用した指導の仕方について研修を実施し、生徒には週末課題として国語と数学の授業動画を配信することから始めた。定期考査前には対策動画を配信し、生徒が意欲的に学習動画を活用し学習に取り組む働きかけを行った。また、7月からは5月に実施した到達度テストのフォローアップ動画を配信し、苦手な部分の克服に向けてスタディアアプリの活用を促した。

2学期には問題の回答率が高い生徒が成績上位者に多い傾向があることを確認した。また、本校生徒のアプリに取り組む姿勢と学習到達度との関係が明らかになった。特にDゾーンにある生徒のアプリ使用率が低いことから、12月からスタディアアプリをはじめとした家庭学習の在り方を抜本的に見直した。学年団で協議し、指導方針の共通理解、生徒への個別の声掛け等をきめ細かくすることを確認した。生徒に取組表を作成させ、学びの実績を可視化する取組を始めた。また、クラス別のアプリ視聴時間や課題の提出状況を教室に掲示し、生徒に対して外発的動機付けを行った。

3学期にはスタディアアプリ活用先進校である高知県の土佐塾中学・高校を訪問した。同校では、スタディアアプリを活用した反転学習を理科、数学で実施しており、学習範囲を予習として動画視聴させ、授業では重要な内容をグループ学習でまとめていく取組が定着していた。本校でもスタディアアプリの授業等への活用について検討していくことにした。また、1年生を対象に進路実現に向けて学力向上の大切さを意識づけるための講演会を実施した。さらには、1月実施の第2回到達度テストと4月実施のスタディアサポートに向けた事前指導として動画配信を行った。

（2）成果

①動画視聴時間・課題提出率の増加

- ・教科担当や担任による働きかけの効果を確認した。また、クラス別のアプリ視聴時間や課題の提出状況を教室に掲示した結果、動画視聴時間の大幅な増加が確認された。特に、課題提出率については76%（4月）から94%（2月）に上昇した。

②基礎・基本の定着

- ・テスト後、結果に応じた連動型課題の配信を行い、担任が生徒一人ひとりに個別指導を行った。2月のスタディアサポートにおいても、学習到達度Dゾーンの生徒の増加を例年に比べ抑制できた。特に英語においては、教科担任からの働きかけを継続して行い、単語テスト等をやり放しにせず、アフターフォローをしている。その結果Dゾーンの生徒の減少が確認された。

③スタディアアプリの授業での活用

活用研究を通して、教科・科目・単元の特性に合わせた予習・授業・復習での活用方法が見えてきた。

④スタディアアプリの活用方針に対する共通理解

到達度テストの事前・事後指導について、学年団で指導方針の共通理解が進んだ。

- ・生徒に出題範囲とその範囲の動画リストを提示
→到達度テストに向けた生徒の準備をサポート
- ・到達度テスト後の連動型課題配信の実施
→全課題の終了を目指して、担任が個別に指導

(3) 課題

①到達度テスト

- ・スタディサプリの仕様が、動画を視聴しなくても課題に取り組めるようになっているので、点数が悪くてもいいと安易に考え、動画を視聴しない生徒が一定数いた。動画を視聴した上で、問題を解くような働き掛けをしていくことで連動型課題の効果を高めるとともに提出状況の改善に繋がる運用を研究する。

②スタディーサポート

- ・授業における活用に焦点をあてることに主眼をおいたため、生徒の真の学力を育成したとまでには至らなかった。引き続き予習・授業・復習でのスタディサプリの効果的な活用を研究するとともに、スタディーサポートの事前指導でのスタディサプリの使い方もあわせて研究する。

③個別最適な学習の実現

- ・個々の生徒に対する個別支援の徹底が不十分であった。2年生では個々の進路実現に向けた主体的な学習を推進する。具体的には、習熟度別、希望進路別の学習計画をモデル化し生徒に提示する。

(4) 令和6年度(第2年次)の計画

①生徒の学習モチベーションを高める働きかけ方の研究と実践

- ・教員研修と外部講師による生徒対象講演会の実施

②進路実現に向けた主体的な学習の推進

- ・習熟度別・希望進路別の学習計画作成をサポート

③予習・授業・復習でのスタディサプリの効果的な活用

④スタディーサポートに向けた事前指導の確立

- ・スタディーサポートに向けた主体的な学びをサポート

⑤個別最適な学習につながるICT活用に関する情報収集

- ・ICTを活用した個別最適な学びの実践校への訪問

4 令和6年度(第2年次)について

(1) 主な取組

前年度の課題として、スタディサプリの動画視聴率は高いが、必ずしも効果的な学習になっていないこと、スタディーサポートの学力分布におけるD層が増加していること、個別の支援が不足していることなどが挙げられた。

そこで、本年度は、各教科においてスタディーサポートの結果を基に基礎学力を分析し、課題内容の見直しを実施した。また、生徒の学習意欲向上に向けた取り組みを進めるとともに、教員の学習支援力向上を目的とした研修の実施や指導方法の改善にも取り組んだ。

さらに、学習意欲に関する先行研究をもとにアンケート調査を実施し、その結果を分析した。研究の最終年に向けて、本年度の調査結果の分析を行い、より効果的な指導法の確立を目指した。

①基礎学力の分析結果と課題内容の見直し

4月から6月にかけては、到達度テストの結果に基づく連動課題を配信した。また、スタディーサポートの結果を基に基礎学力の分析をし、7月の夏課題から10月のスタディーサポートまでの期間にかけては、次の内容(イ)の課題に取り組みさせた。

ア 基礎学力の分析結果

- 英語：全国平均正答率と比較して大きく下回る内容はなかったが、全体的に見ると「リスニング」の問題では全国平均正答率を僅かに下回っていた。一方で、「文法：動詞の時制」および「文法：比較」が全国平均正答率を10%以上上回っていた。リスニング力を高める課題の工夫が求められることが分かった。

- 数学：全国平均正答率と比較して10%以上下回った内容は、「図形と計量」および「図

形の性質」であった。一方で「数と式」では全国平均正答率を20%以上上回っていた。1年次の内容に関しては正答率が低く、定期的に復習する機会を設けることが重要だと分かった。

- 国語：全国平均正答率と比較して大きな差はないものの、「現代文知識・技能」「論理的文章読解」「文学的文章読解」においては、7割の問題で全国平均を下回る結果となった。一方で「古文知識」については6割強の問題で全国平均正答率を上回る結果となった。これらの結果から、文章の読解に必要な知識の理解を支援する取り組みをさらに強化することが重要だと分かった。

イ 分析後の課題

- 英語：リスニング力向上を目的とし、スタディサプリの英検対策動画を配信した文法・文章読解については、市販教材を活用した。
- 数学：1年次の内容に関する得点率が低い生徒の割合が高かったため、1年次の学び直しをスタディサプりと教員作成のプリントで強化した。
- 国語：現代文の理解において、スタディサプリの動画のみでは文章全体を見ることができないため十分な学習効果が得られないことが課題となった。自宅にプリンターを所有している生徒の割合が低いため、現代文は教員作成のプリントを活用し、古文・漢文はスタディサプリの動画を用いる形で対応した。

これら3教科とも、スタディサプリの配信に加え、教科担当が作成したプリントや市販教材など、学習ツールの多様化を図った。特に、イメージ化による理解の強化や英語発音の聞き取り能力の向上が求められる内容などでは、動画を活用した課題を中心に配信した。

10月のスタディサポートの結果をもとに、基礎学力をさらに分析し、各教科でG T Zの層別課題を配信した。すべての層別課題を全生徒に配信し、生徒自身が自分の学力に応じた課題に取り組めるようにした。また、より上位の層の問題にチャレンジできる仕組みを整え、自ら学習内容を選択し、調整できるよう工夫した。

現在、生徒の進路別課題の作成に取り組んでおり、今後も生徒の学習意欲向上に向けた取り組みを継続し、効果的な実践を積み重ねていく。

②生徒の学習意欲向上への取り組み

生徒の学習意欲を高めるため、以下の取組を行った。

ア 講演会の実施

実施日：令和6年7月12日（金）

対象：2年生

講師：川崎医療福祉大学 医療福祉学部 子ども医療福祉学科

教授 橋本 勇人氏

教授 中川 智之氏

川崎医療福祉大学から2名の教授を招き、「頑張ることの大切さ」をテーマに講演を行った。生徒の感想には、「努力しても成功するとは限らない。しかし、努力しないと成功することはないなら、私は努力することを選択したい。」といった前向きな意見が多く見られた。このことは、講演が生徒の内発的動機づけに影響を与えたことを示唆していると考えられる。

イ 個別指導の充実（面接週間の導入）

面接期間：4月、9月、2月

個別最適な指導の充実を図るため、新たに「面接週間」を設定した。これにより、生徒と担任がじっくり向き合う時間を確保し、進路指導や学習相談の機会を増やした。面接の記録には「スタディサプリア」のポートフォリオ機能を活用し、生徒が自らの成長を振り返る機会

を提供した。また、担任からのコメントをフィードバックできる機能があれば、指導助言の充実につながるという教員の意見もあった。面接を通じて、普通科では専門科と比較して進路意識の低い生徒が多く、それが学習意欲の低下につながっていることが課題として浮かび上がった。そのため、生徒が自分自身の潜在的な力に気づき、将来の夢を見つけられるような支援の在り方を検討する必要がある。

③教員の学習支援力向上のための取り組み

ア 研修

実施日：令和7年3月24日（月）

内 容：自律的な学習を促進するための具体的な戦略や実践的なアプローチについて

対 象：本校教職員

講 師：岡山大学 学術研究院教育学域 准教授 岡崎 善弘氏

前述した課題を踏まえ、教員を対象とした研修会を計画した。本研修では、認知心理学の知見をもとに、生徒の学習意欲向上のための指導法について理解を深めることを目的とする。

イ 教員授業見学

期 間：6月、11月

内 容：授業の見どころを forms で調査をし、全教員へ周知。

見学後は、自分の授業に取り入れたいところや感想を forms で回答。

見学人数：6月64名（延べ）、11月27名（延べ）

教員の授業力向上のために、授業見学の強化を図り、発問の仕方やICT機器の活用、1人1台端末を用いた授業の実践について相互に学び合う機会とした。

ウ 他校の見学、セミナー参加

1) 笠岡市立笠岡小学校

訪問日：令和6年6月20日（木）

訪問者：本校教員2名

2) 和歌山県立有田中学校

訪問日：令和6年6月27日（木）

訪問者：本校教員2名

3) NEW EDUCATION EXPO 2024 OSAKA

参加日：令和6年6月15日（土）

参加者：本校教員5名

個別最適な学びの実践について理解を深めるため、先進校の訪問やセミナーへの参加を行った。笠岡市立笠岡小学校の授業では、児童が自ら学び方を身につけることを重視し、一人ひとりの進度に応じた複線型の授業が実施されていた。また、児童同士が互いに学び合う場面も多く見られ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体となった授業が展開されていた。NEW EDUCATION EXPO 2024 OSAKA では、5名の教員が本研究につながるセミナー等に分かれて参加し情報収集を行った。教員による先進校の訪問やセミナーへの参加を通じて得た知見を職員会議で報告し、教員間で共有する機会も設けた。

④学習意欲に関するアンケート調査結果

	安心して学べる環境	欲求・動機レベル			学習行動レベル						認知・感情レベル		
		知的 好奇心	有能 さへの 欲求	向社 会的 欲求	情報 収集	自発 学習	挑戦 行動	深い 思考	独立 達成	協同 学習	おも しろさ と楽 しさ	有能 感	充実 感
学年 全体	2.90	2.91	3.29	3.57	3.03	2.74	2.41	2.91	2.56	3.04	2.81	2.19	3.22
普通 科	2.83	2.85	3.25	3.49	3.04	2.68	2.27	2.85	2.48	2.96	2.73	2.10	3.20
家政 科	2.94	2.94	3.37	3.70	2.94	2.60	2.26	2.89	2.46	3.03	2.74	1.87	3.21
看護 科	2.97	3.03	3.37	3.67	3.09	2.99	2.68	3.12	2.62	3.23	3.03	2.38	3.32
福祉 科	2.67	2.63	3.04	3.48	2.70	2.41	2.34	2.57	2.48	2.89	2.54	2.09	2.91

4：「あてはまる」、3：「ややあてはまる」、2：「あまりあてはまらない」1：「あてはまらない」の4段階で調査し4点が最高値とする。

＜アンケート調査結果の分析＞

自己調整学習のプロセスの中心となる要素は、「欲求・動機、学習行動、認知・感情」であるとされている（櫻井，2024）。また、これらの要素に対しては「安心して学べる環境」が影響を与えることが指摘されている。これらの要素と「安心して学べる環境」との関係について、アンケート調査を基に分析を行った。まず、安心して学べる環境に関する結果を見ると、学年全体の平均値は2.9であった。生徒が自律的に学び自己実現を目指せるような環境が今よりも整うことでより安心して学べる環境をさらに整備し、生徒がより自律的に学びに取り組める環境になると期待できる。次に、欲求・動機に関する結果では、どのクラスにおいても知的好奇心の得点が低く、一方で向社会的欲求が最も高いことが明らかとなった。この結果は、生徒が学びに対する興味関心よりも、他者との関わりや役立つことへの関心を強く持っていることを示唆していると考えられる。向社会的欲求が喚起されることで生徒は自身の得意分野を核としながら将来の目標を形成し、その目標達成に向けて現在の学習への動機付けが高まることが指摘されている（櫻井，2024）。そのため、向社会的欲求を促進しながら、知的好奇心を喚起するための教育的支援が必要であると考えられる。

学習行動に関しては、「情報収集」や「協同学習」の得点は比較的高い結果を示した一方で、「挑戦行動」の得点は低い傾向にあった。具体的には、生徒自身が課題に関連する情報を収集し、仲間と協力して課題解決に取り組む姿勢は見られたものの、困難と感じる課題に対して主体的に挑戦する行動は不足していることが分かった。この結果から、今後の課題として、困難な課題にも果敢に挑戦しようとする意欲を高めるための支援が必要であると考えられる。また、これらの学習行動は、生徒の自律的な学習意欲に支えられており、学習意欲のさらなる向上を促すための環境整備が求められる。認知・感情に関する結果では、「安心して学べる環境」「欲求・動機」「学習行動」と比較し最も低い傾向にあった。特に有能感の得点が低いことが明らかとなった。生徒が自身の学びの成果を認識し、有能感を高めるための支援が必要であると考えられる。また、有能感を高めるための具体的な方法の一つとして、振り返り活動の充実が挙げられる。学習成果を一定の基準に基づいて評価・判断する機会を設けることで、達成感を得られ、有能感が

高まることが指摘されている（櫻井，2024）。本研究では、課題への取り組み後に生徒自身が振り返りを記録する活動を導入しているものの、その振り返り活動の質を高めるための支援方法をさらに検討していく必要があると考えられる。

今回のアンケート調査結果を基に、振り返り活動の支援のあり方や挑戦行動を促すための指導方法について具体的な検討を行うことが挙げられる。また、今後のデータとの比較分析を通じて、自己調整学習を促進するためにICTを活用した個別最適な学習に関する支援方法の構築を目指したい。

本校には普通科（類型・子どもコース・健康スポーツコース）、家政科、看護科、福祉科があり、各クラスが特徴を持った集団であることから、この分析結果を踏まえた面談を実施していくことで、生徒の学習に対する主体性を向上させ、個別最適な学びの実現につながると考える。

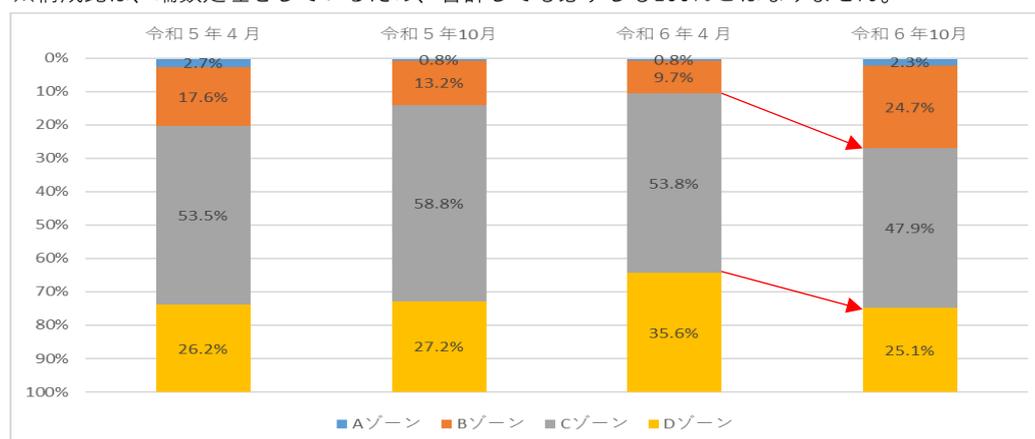
（２）成果

①学習の自律性の向上

学習到達度ゾーンの変容状況（令和５年度入学生）

	令和５年４月		令和５年10月		令和６年４月		令和６年10月	
Aゾーン	7	2.7%	2	0.8%	2	0.8%	5	2.3%
Bゾーン	45	17.6%	33	13.2%	23	9.7%	54	24.7%
Cゾーン	137	53.5%	147	58.8%	127	53.8%	105	47.9%
Dゾーン	67	26.2%	68	27.2%	84	35.6%	55	25.1%

※構成比は、端数処理をしているため、合計しても必ずしも100%とはなりません。



令和６年４月実施のスタディサポートの結果、GTZでは、入学当初よりAゾーンとBゾーンの減少、CゾーンとDゾーンの増加が見られた。そこで、生徒と担任との面談の回数を増やしたり授業力を向上させる取り組みや成績を分析し課題内容を検討したりする取り組みをすることにより、生徒が学習に向けて関心を示しだした。また、自分に合った課題を自分で選択し取り組む環境を整えていった。その結果、令和６年10月には、Aゾーンが1.5%増加、Bゾーンが15%増加、Cゾーンが5.9%減少、Dゾーンが10.5%減少した。

②生徒の変容

ア) 個別追跡調査結果

○普通科

生徒	G T Z 高2 4月	G T Z 高2 10月	到達度テスト 高2 1月 正解率	動画視聴時間 (令和6年度)	確認テスト完了 講義数 (令和6年度)
A	A 2	A 2	国語 86.0% 数学 65.1% 英語 81.2%	1 4 時間 5 2 分	1 4 6
B	B 2	A 3	国語 76.7% 数学 81.3% 英語 43.7%	3 1 時間 2 8 分	3 3 3
C	B 2	B 3	国語 76.7% 数学 53.4% 英語 56.2%	4 1 時間 1 6 分	1 3 2
D	C 2	B 3	国語 60.4% 数学 32.5% 英語 35.9%	4 0 時間 1 1 分	2 2 0
E	D 1	C 3	国語 69.7% 数学 20.9% 英語 26.5%	2 0 時間 3 4 分	1 5 2

生徒Aは、入学当初から成績も高かった。課題に対する取り組みも良い。2年生になると、課題以外にもスタディサプリの化学基礎を自ら視聴し取り組むなど学習に関して自走できつつある。進路については明確ではないが、今後目指したいものが決まってくるとより意欲も高まり学習時間も増加すると思われる。生徒Bは、家庭学習習慣がついている生徒である。高校2年1月の到達度テストの英語を除くと到達度テストでも入学時から安定して7～8割の得点をとっている。授業時間以外で、担任が作成した独自の小テストとスタディサプリを併用することにより今回G T ZをBからAに上げることができた。生徒Cは部活動に力を入れており、その実績を活かした進学を考えている。部活動の時間で校内の進路補習を受講できなかったが、「スタディサプリ」を活用し、自主的に基礎学力の向上に努めている。自分のペースに合った学習の取り組みが可能になった。限られた時間の中で効果的に学習を進めるために重点的に学ぶ内容を整理し、集中して取り組ませることで進路実現をさせたい。スタディサプリの取り組み時間が増えたのは、担任、顧問からの部活動と学習の両立について声かけを重ねていった成果である。学習時間は4 1 時間 1 6 分と好成績の中では最長であった。生徒Dは、担任との面談を重ねるなかで、栄養士を志望する意識が芽生え、次第にその方向へと関心が向かうようになった。それに伴い、学習時間も確保できており取り組む姿勢も自分で必要な課題に取り組むなど学習に向かう姿勢の変化が見られた。志望する職業を明確にし、進学先について担任と何度も調査を重ねる中で、学習面でも弱点を克服するためにスタディサプリを活用し、自律的に学習に取り組む姿勢が養われていった。生徒Eは、進路意欲はあるもののまだ将来に目指したい目標が明確にはなっていないが、担任との面談を重ねて学習を習慣化しているところである。働きかけに対して取り組む姿勢はとても良い。今後は、数学や英語について学習の進め方などを見直していく必要がある。

○専門科

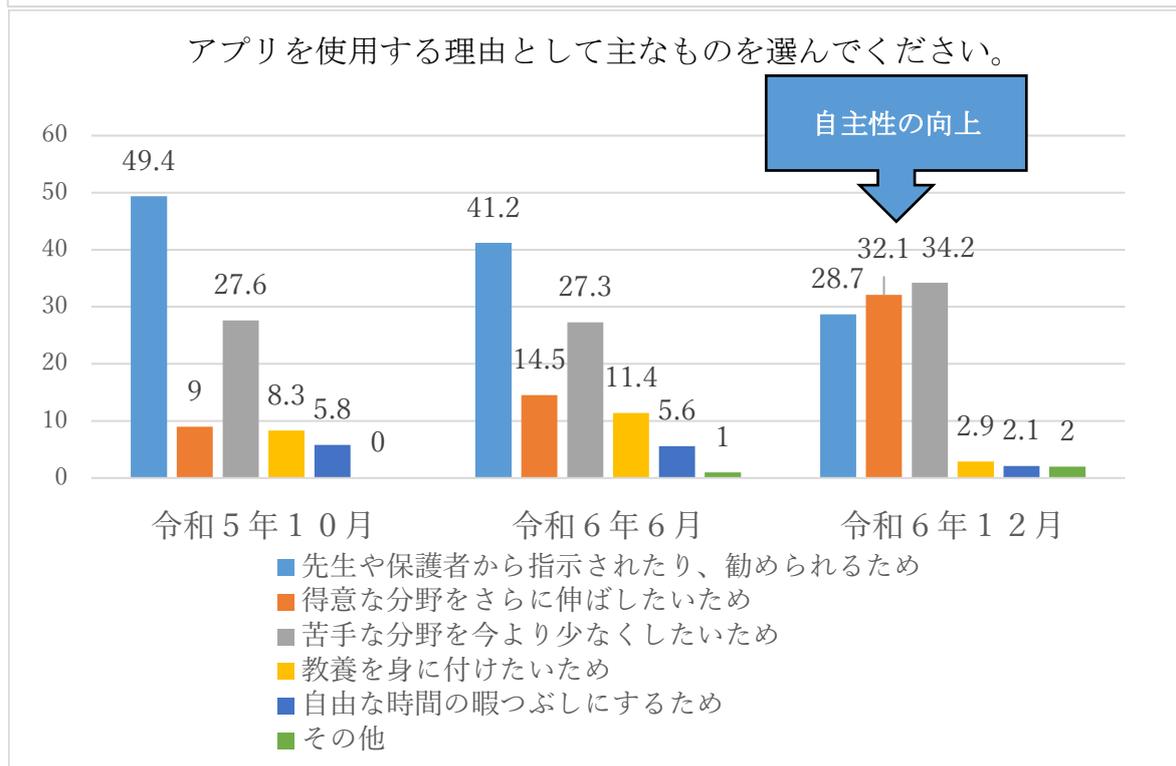
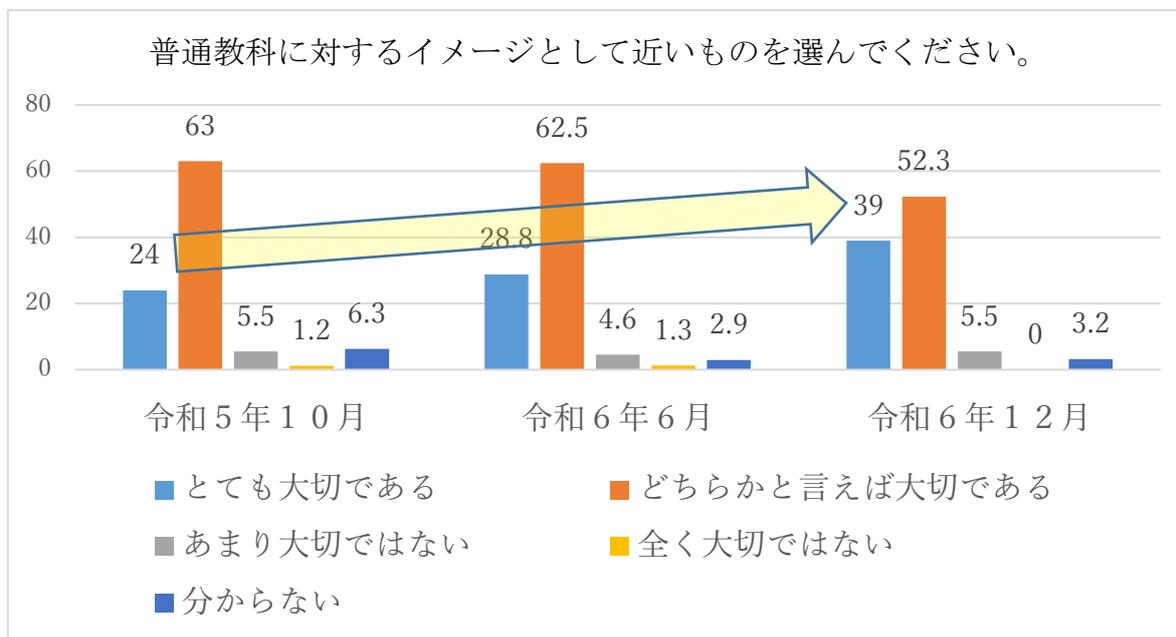
生徒	G T Z 高2 4月	G T Z 高2 10月	動画視聴時間 (令和6年度)	確認テスト完了講義数 (令和6年度)
家政科A	B 3	B 3	4 6時間4 4分	2 0 2
家政科B	C 2	C 1	1 4時間1 2分	1 9 1
家政科C	D 1	C 1	1 3時間2 8分	2 0 6
看護科A	A 3	A 1	1 8時間2 7分	2 0 6
看護科B	C 3	C 1	1 7時間1 9分	1 7 1
看護科C	D 1	D 1	4 時間1 0分	1 8 5
福祉科A	C 3	C 3	3 時間 6分	1 5 3
福祉科B	D 1	D 1	1 時間4 4分	9 3
福祉科C	D 1	D 1	1 時間5 1分	6 8

専門科は普通科とカリキュラムが異なる。2年次になると専門教科の単位数が増え、その分、普通教科の単位数が減少する。普通科では国語・数学・英語の3教科が合計15単位であるが、家政科では8単位、看護科では7単位、福祉科では5単位となる。各専門科では、学校外での実習や検定の取得が求められる中、例年、2年次のスタディサポート結果は成績が低迷する傾向にあった。しかし、今年度は家庭学習におけるスタディサプリの活用や、担任による働きかけの影響で、成績を維持・向上させた生徒が多かった。

- ① 家政科では、生徒Aは食物調理技術検定・被服製作技術検定・保育検定において高得点で合格している。向上心が高く、家庭クラブの役員も務めており、担任との関わりも深い。クラスの模範的な存在であるため、さまざまなことに前向きに取り組んでいる。その結果、G T ZのB 1という成績を維持することができた。生徒Bおよび生徒Cも、将来の夢が明確で学習意欲が高く、スタディサプリを活用した振り返りも具体的に行っていた。その結果、10月のスタディサポートでは学力の向上がみられた。
- ② 看護科では、スタディサポートが看護臨地実習終了直後に実施された。臨地実習前からスタディサポートを見据え、学習計画を立てた上で担任と面談を行い、臨地実習に臨んだ。その結果、直前の学習に頼るのではなく、長期的に普通教科の学習に取り組むことができた。その成果として、生徒Aと生徒Bは大幅に成績を伸ばした。生徒Cに成績の変化は見られなかったが、自身の弱点に気づき、克服に向けて取り組む姿勢が見られた。今後、この取り組みを継続することで学力の向上が期待される。
- ③ 福祉科では、生徒Aは将来の夢が明確であり学習意欲も高い。担任の働きかけにより、スタディサプリを活用した学習を始めることができた。生徒Bは、医療系の専門学校への進学を考えている。基礎学力の必要性を感じてスタディサプリの問題に取り組み始めた。生徒Cは、就職を希望している。義務教育の学習についても学び直しの必要性を担任との面談を重ねて気づき、その対策としてスタディサプリを活用している。

以上のことから将来の夢を意識させ、学習意欲を向上させるような働きかけが必要である。また、専門科においては、自己実現に向けた年間の学習計画を専門科目とのバランスを取りながら計画し、課題に取り組めるよう支援していくことが重要であることが明確になった。

イ) ICT活用による個別最適な学習推進モデル事業 生徒意識調査結果（岡山県教育委員会実施）
 【令和5年10月 n=254、令和6年6月 n=240、令和6年12月 n=219】



生徒の意識調査の結果、「普通教科をととても大切である」と考える生徒の割合が24%から39%へと15%増加した。これは、専門科生も専門教科だけでなく、普通教科の重要性をより強く認識するようになったことを示している。また、学習アプリを使用する理由として「得意な分野をさらに伸ばしたい」と回答した生徒の割合が9%から32.1%へと23.1%増加した。この結果から、生徒の学習姿勢が「苦手克服」だけでなく、「得意分野のさらなる伸長」へと変化していることが読み取れる。また、令和6年12月の結果から、「先生や保護者から指示されたり、勧められるため」と回答した生徒は、研究当初より20.7%減少し、「得意な分野をさらに伸ばしたい」と回答した生徒は、2

3. 1%増加、「苦手分野を今より少なくしたい」と回答した生徒は、6. 6%増加した。「これは、学習アプリが個別最適な学習を提供できる点が影響していると考えられる。従来の一斉授業では難しかった生徒一人ひとりの得意分野を伸ばす学習が可能になり、その結果、学習への意欲が高まることにも影響したと考えられる。これらの調査結果から、生徒の普通教科に対する意識の向上と、学習アプリの活用目的の変化が明らかになった。特に、普通教科を重要視する生徒が増加したことは、学力向上のみならず、進路選択の幅を広げる点でも有意義である。また、学習アプリを活用することで、生徒が自ら学習を進める姿勢を身につけ、得意分野を伸ばすという意識が高まっていることが分かった。今後は、学習アプリの活用をさらに促進し、生徒の学習意欲を向上させる施策を検討する必要がある。また、普通教科の学習の重要性を継続して伝えていくことで、専門科目とバランスよく学習できる環境を整えることが求められる。こうした取り組みを進めることで、生徒の学力向上に寄与し、将来の進学・就職の選択肢を広げることができると考えられる。

(3) 課題

①基礎学力の評価方法

普通科と専門科ではカリキュラムが大きく異なる。専門科では、実習や検定などを通じて、基礎学力以外のどのような学力を育成できたのか学習成果の評価には多面的な視点が求められる。評価基準を普通科と専門科で分け、それぞれの特性を踏まえた評価方法を検討する必要がある。

②個別最適な学習の実現

進路別課題に取り組ませるにあたり、進路指導や面接の進め方、生徒の力を引き出すための関わり方など、学習支援のあり方について検討する必要がある。

③自己肯定感の向上と自己調整能力の育成

個々の生徒の個別最適な学びを効果的なものにするには、学習に対する生徒の内的要因にも着目した働きかけが必要である。小さな挑戦と失敗を繰り返しながら、少しずつ成功体験を増やすことで、生徒の自己肯定感の大きくなれば、学習の自己調整も前向きに行えるのではないかと考えている。

(4) 令和7年度（第3年次）の計画

①生徒の学習モチベーションを高める働きかけ方の実践

- ・自己肯定感と自己調整能力を高める生徒対象講演会の実施
- ・生徒心理への働きかけ方についての教員研修
- ・担任による年3回以上の個人面談の実施

②進路実現に向けた主体的な学習の推進

- ・進路希望に合わせたスタディサプルの効果的な活用
- ・進路希望別の学習計画作成をサポート

③ICT活用による個別最適な学びに関する研究のまとめと実践

- ・専門学科生の基礎学力の捉え方の研究
- ・生徒心理を大切に面談スキルの研究
- ・ICTを活用した自己調整学習の研究

[参考・引用文献]

- 栃木県総合教育センター. 学ぶ意欲をはぐくむー「学習に関するアンケート」を活用してー. 平成23年3月
- ヤナ・ワインスタインメーガン・スメラック オリバー・カヴィグリオリ 山田祐樹監修 岡崎善弘訳. 認知心理学者が教える最適な学習法 ビジュアルガイドブック. 東京書籍. 2023
- 櫻井茂男. 自律的な学習意欲の心理学. 誠信書房. 2024